

苗木が被害を受けた。

筆者は試験地設定のために苗畑設営から植栽までの160日の間で計120日間同地に滞在した。苗畑や植栽作業にたずさわった住民にとってこれらの作業は初めての経験であり、互いに言葉が通じない中で本試験地が設定できたのは互いに心から信頼できるリーダー Roby 氏の存在が大きい。試験地設定後、前述の作業手順はマニュアルとして、各リーダーおよび政府関係者に配布し好評を得ている。

本試験植林作業にたずさわった住民の経験が、自らが植林を行おうとする意識、あるいは森林保全や

火災防止に対する意識の改善に繋がれば幸いである。さらには本試験植林が同地域の数万 ha の無立木草地を森林地に変身させる第一歩になれば幸いである。

〔引用文献〕 1) 原口直人他 (2008) : 吸収源 CDM の方法論及びプロジェクトの開発にたずさわって. 海外の森林と林業 No. 71. 2) UN (2008) List of least developed countries. <http://www.un.org/special-rep/ohrrls/ldc/list.htm>

## 図書紹介

黄砂対策植生回復技術マニュアル (砂漠化対策と乾燥地の緑化技術)

真木太一・吉川 賢他著, 国際緑化推進センター, 2009年, 無料

日本では通常なじみのない場所ではあるが、地球上の陸地面積のおよそ1/3を占める乾燥地とはどのようなところなのか。砂漠化が進んでいると言われるが、砂漠とはなにか、砂漠化とは果たしてどのようなことを指し、どのような要因が引き起こす現象なのか。乾燥地で緑化・修復しなければならない、緑化修復が可能な場所、あるいは緑化ができないまたは緑化してはいけない場所とはどのようなところなのだろうか。

本技術マニュアルは平成16年度～20年度の5年間にわたり中国・モンゴルの2カ国を対象に実施された林野庁の補助金事業「黄砂対策植生回復実証調査事業」による調査結果をもとに作成されたものであり、次の総論、各論とも4章ずつからなる。

(総論) I 乾燥地生態系の特徴, II 乾燥地の環境, III 乾燥地の土地利用と砂漠化, IV 砂漠化対

策の方向

(各論) I 緑化基礎工, II 植生工, III 乾燥地緑化と土地利用, IV 緑化事例

本書はマニュアルと名づけられてはいるが、内容は乾燥地の地理、地形形成や生態、さらには住民の生活との関わりや政策など社会的な視点からの問題把握も多く含まれ、特に総論Ⅲ章「乾燥地の土地利用と砂漠化」では緑化事業が出来る可能性のある様々な問題が広く世界の事例から紹介され、事業対象とした地域や乾燥地についてだけではなく、他の様々な気候帯、生態系のシステムにおける植生の維持や修復ということについても考えさせられる。広く語りながら話が乾燥地の話に収斂していくのは本書の目的上やむを得ないであろうが、これらの執筆者達による他の気候帯、生態系での話も含めたものが読みたくなる、大学などでの教科書として出版されてもおかしくない充実したものとなっている。事業報告書という性格上非売品であることはやむを得ないが、web上での公開などにより広く情報を提供されることが期待される。あるいはさらに充実させた内容のもの市販も考慮してほしい書である。

(田淵隆一)